第 3 回　2013 年 10 月 8 日（火）

日本の自然暦と環境観

講師：**中牧弘允**（なかまきひろちか）さん
吹田市立博物館館長　国立民族学博物館名誉教授

天体絵柄のネクタイを身につけられた中牧館長は、先に案内したテーマ「日本の歴史観と環境観」を「日本の自然暦と環境観」に変えて、より具体的に探っていきます、と始めました。

◆生活暦としての自然暦、ビジネスにも活かす

日本各地には季節によって、生活や仕事の時期を雪形（ゆきがた）や開花、渡り鳥や動物の出現を目安とする伝承が残っています。この素朴な暦が自然暦＝旧暦です。農業や漁業との関連が深く、1 年を通算せず、均等な 1 カ月もなく、必ずしも日数を数えないという特徴があります。年始は概ね決まっているのですが確定していません。何月何日という認識もありません。

この旧暦を、暮らしとビジネスに活かす例を、繊維業界大手クラボウの元常務取締役小林弦彦さんが『旧暦はくらしの羅針盤』で示しています。繊維業界にとって天候予測は極めて重要です。彼は旧暦による天候予測の的中率 7 割以上をもって、ビジネスチャンスを得ていました。また、ヨットで世界周航した松村賢治さんは、月や星への関心から旧暦に興味を抱き、大阪南太平洋協会を設立。旧暦カレンダーを発行し、売上を南太平洋諸島の支援にあて、スローライフを取り戻そうと提唱しています。いま旧暦は自然回帰を志向する運動と結びついています。

◆雪形は郷土の山の掲げる美しい紋章

雪形【山腹に岩肌と積雪が織り成す模様を人が何かの形に見立てて名づけたものの総称】の名前は北海道から愛媛県まで 431 件あります。私のふるさとの信州・南アルプスの駒ヶ岳には白鳥と飛竜と称される雪形があります。白馬岳には代掻き（しろかき）馬、福島・吾妻小富士には種まきウサギなどの名前があり、季節の変化と農法とが結びついた自然暦です。ロマンチックな感じがあります。

「雪形は郷土の山の掲げる美しい紋章であり、新しい年の行く手を占う信頼厚い予言者である」と語ったのは雪形の研究者で山岳写真家の田淵行雄氏（1905～1989 年）。安曇野と北アルプスを愛したナチュラリストです。高度経済成長期に雪形への関心が薄れていく状況に対して田淵は、「わが国特有な民俗として郷土の山を飾る紋章雪形が、その栄光の歴史を閉じようとしているばかりか、その栄光の伝統さえ人皆の心の中から消えようとしている」と嘆いていました。この田淵の作品、遺品などを展示する田淵行男記念館が安曇野の地に 1990 年に開館しています。メルヘンチックな所です。また、4～5 月にかけて雪形に関連したイベントが大町市を中心に行われています。国際雪形研究会もできており、国際的にリードできる研究領域となっています。

◆各地に伝わるいろいろな自然暦

自然の移ろいとともにある自然暦は各地にいろいろあります。石見地方では「山木蓮が咲くと籾蒔き、散ると田植え」、和歌山県潮岬では「ブリ漁はサツマイモの芽が二、三寸伸びた頃」、和歌山県古座では「麦が赤くなるとカツオが来る旬」、近畿地方では「鶯の声を聞いて苗代に種をまく」、長野県明科では「カッコウが鳴くから大豆をまく」、岡山県落合では「醍醐桜の満開の頃に籾種をまき、散り始めの頃にシイタケの榾木（ほたぎ）を起こして組む」と伝えられています。さらに、アマガエル、彼岸花、麦まき鳥（セキレイ、ミヤマガラス）、麦まきトンボ、田打ち桜があります。

◆中国からの暦の伝来

『魏志倭人伝』には自然暦で暮らしている日本人について「倭人は正歳四時（月の朔望と二十四節気）を知らず」「春耕秋収を記して年紀となす」と書かれています。システマチックな暦を使っていないことを後進性、野蛮性とみていました。日本には、4、5 世紀に中国の暦が伝わりました。稲荷山古墳の太刀銘に辛亥（かのとい）年、隅田八幡宮の鏡銘に癸未(みずのとひつじ)年と刻まれています。巨大古墳の造営には統一された暦が必要だったことがわかります。『日本書紀』によると、6 世紀中葉、欽明天皇の時代に暦博士が朝鮮半島から到来したと記述があります。602 年、百済僧・観勒(かんろく)が暦本をもって来朝しています。天智天

皇は671年6月10日に近江大津宮に水時計（漏刻）を設置し、これが今日の時の記念日になっています。持統天皇の時代に正式に中国の暦を導入し律令体制を整えました。役人が布令するのに必要としたのですが、農民は自然暦で十分でした。

◆太陰太陽暦から太陽暦に乗り換えた明治

日本では、中国暦の二十四節気と五節句以外に、季節の移ろいを示す節分・彼岸・社日・八十八夜・入梅・半夏生・土用・二百十日・二百二十日の九つの日本独特の雑節をもった自然暦を長く用いてきました。ところが、明治政府は西洋文明を取り込むために、明治5年12月3日を明治6（1873）年元日とし、中国暦の太陰太陽暦から西洋の暦（太陽暦）に変えました。このため1ヵ月の空白ができ、調節のため月遅れの行事を入れました。お盆は東京では7月で、それ以外の地方は8月に営まれ、祇園祭、天神祭は月遅れの行事となり、さらに、ひな祭り、端午の節句、七夕も月遅れで行う行事となりました。

◆利用される旧暦カレンダー

潮の干満をみる漁業や農耕時期をみる農業では旧暦が残っています。沖縄の年中行事は今も旧暦で営まれています。ここで、陰暦沖縄カレンダーと1987年から発行し、スローライフを主張している太陰太陽暦カレンダー、旧暦カレンダーなどを回覧します。これらの愛好家を「キュウレキスト」と称し、和食レストラン料理長、酒造り自営業者、服飾店経営者、海運・水産業者、農家、養蜂家、古典を教える大学教員、趣味の釣り人、俳人、お月さま好き、七十二候愛好家が利用しています。

明治時代に表舞台から消えた旧暦カレンダーは今、静かなブームです。太陽暦に背を向けた旧暦はスローライフや精神世界で用いられています。陰暦、ルナカレンダー、新暦・旧暦カレンダー、月の満ち欠けカレンダー、月と季節の暦、旧暦菜園ダイアリーなどの名称がついて、家庭菜園の有機農法、月の動きと生命（環境）への影響、旬の食材、衣替え、体調管理、出産日、酒の仕込み、梅の土用干し、お茶の販売日、月による心の癒しなどに利用されています。昨年、旧暦9月9日、太陽暦10月19日の重陽の節句の催しが浜屋敷で行われました。抹茶をいただき、風情がありました。

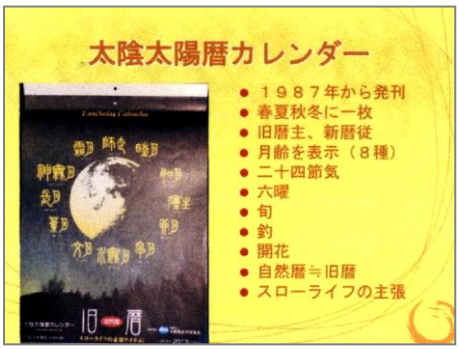
◆生態系の知恵を取り入れた自然暦

自然歴をめぐる環境思想は二つあります。自然の移り変わりを目安とする古来から続く自然歴は、「人間と自然系が織りなす生態系の暦だ」（梅棹忠夫）というもの。

これに対して、自然暦=旧暦というノスタルジックな暦は、現代の生活に潤いを与えるもので、伝統的文化の継承に活かそうというもの。普段は西暦に縛られているが、体系化・制度化された旧暦を自然環境への見直しとして位置づけようとする新しい動きです。梅棹流に考えると、人間＝装置・制度系（文明系）の暦における生態系の復活。文明系の暦を使っていながら、文明の基層に生態系があることを認識し、生態系の知恵、スタイルを取り込もうとしているのだと思います。

◆地域に根ざした暦（時間）を生きる

東京天文台が制作した「太陽系の惑星・地球の誕生」「月の誕生」のスライドショーを映します。私たちは自然、太陽、地球、月の関係の中で生活を営み、自然観察から生まれた暦、自然暦と、天文観察から生まれた暦、天文暦を、太陰太陽暦、イスラム暦、西洋暦として用いています。世界にはそれぞれの地域に根ざしたさまざまな暦があり、うまく使い分けています。日本ではグレゴリオ暦（新暦）と旧暦（陰暦）を、イランでは伝統的太陽暦と太陰暦のイスラム暦そしてグレゴリオ暦の三つを使い分けています。中国では太陽暦が中心ですが、陰暦を使用して旧正月を祝っています。このように世界の人びとは、ひとつの暦―時間（世界暦）に生きるのではなく、いくつかの暦―時間を理解し、折り合って生きているのです。



講演後、中牧館長より、旧暦や天文現象を織り込んだオリジナルカレンダーの来年度版が抽選で5人にプレゼントされました。

楽座は楽しい。ゆったりした気分で、きちんと話が聞ける。